■（１０８）記者には無縁の「仕事納め」　受験生もファイト！

年の瀬の総選挙で政権に返り咲いた自民党。新首相を選ぶ臨時国会の日程は２６～２８日のわずか３日間だった。国会は暦通り、「仕事納め」とともに年末年始の休暇に入る。

新聞の公式な休みは、原則として年に１０日ある休刊日だけ。新聞が発行される限り、すべての記者が一斉に休むわけにはいかない。ローテーションを組んで、必要な出番を確保し、取材・出稿を続ける。当然ながら、大みそかの宿直勤務も必要で、かつては入社１年目の新人の「指定席」だった。「家庭を持つ記者は家族と過ごしたい。新人は基本的に独身なので、会社に泊まっても同じだろう」。それが約２５年前に大みそかの宿直を言い渡された際の理由だった。当時は携帯電話がなく、職場を離れて外に買い物に行くことはできない。そのうえ、初任地の山陰地方の職場では、当時、コンビニのように元日朝も営業している店は周囲になかった。それだけに、先輩が差し入れてくれた手作りおせちが妙にうれしかった。

仕事納めと無縁なのは、もちろん記者だけではない。受験生も同じで、最後の追い込み中だろう。新年の楽しみは、おせちではなく「合格」。指導の先生も頑張って。（山）